



奨励賞

松ぼっくり

若杉町 波佐間嘉子

「面白くも無き世を「面白く」
誰が語ったのであったか

「おっちゃん松ぼっくり拾いにいった
ね」

「うん 帰りはいつも茶店でケーキを食
べた」

不惑を越えた娘たちが喋っている

夫の兄

家を継ぎ守る長兄^{ひと}であった

築一〇〇年に近かった家

風呂は昔ながらの薪風呂で

松ぼっくりは焚き付けに使った

一人で拾いに行くのは余りに淋しかった
のだ

常に小学生だった私の娘二人を誘った

コーヒーが好きで

馴染みの店もあったようだ

気丈な年寄りになっていたのに

土間で転んで

脳の大事な所を打ってしまった

物言わぬままの七年間 そのまま

何も語らず旅立って行ってしまった

アルバムに残る沢山の面影

その裏側の生き様

面白く 生きられましたか